

令和 4 年度
孤独・孤立対策に資する NPO 法人等への
調査（現地調査）
報告書

令和 5 年 3 月

孤独・孤立対策に資する NPO 法人等の連携促進等に
関する調査研究事業

目次

1. 調査概要	3
1-1. 背景・目的	3
(1) 背景	3
(2) 本調査の目的	4
1-2. 調査対象・方法	4
(1) 調査対象	4
(2) 実施方法	6
(3) 調査実施概要	7
2. 調査結果	10
2-1. 認定特定非営利活動法人 茨城 NPO センター・コモンズ	10
(1) 「思いがけず」孤独・孤立の解消に寄与した好事例とその特徴	10
(2) 連携事例及び連携ニーズ・連携における課題	12
2-2. 認定特定非営利活動法人 キッズドア	14
(1) 「思いがけず」孤独・孤立の解消に寄与した好事例とその特徴	14
(2) 連携事例及び連携ニーズ・連携における課題	18
2-3. 社会福祉法人 新発田市社会福祉協議会	20
(1) 「思いがけず」孤独・孤立の解消に寄与した好事例とその特徴	20
(2) 連携事例及び連携ニーズ・連携における課題	23
2-4. 猫町倶楽部	25
(1) 「思いがけず」孤独・孤立の解消に寄与した好事例とその特徴	25
(2) 連携事例及び連携ニーズ・連携における課題	27
2-5. 特定非営利活動法人 エイブル・アート・ジャパン	29
(1) 「思いがけず」孤独・孤立の解消に寄与した好事例とその特徴	29
(2) 連携事例及び連携ニーズ・連携における課題	33
3. 総括・示唆	35
3-1. 「思いがけず」孤独・孤立の解消に資する活動を行っている団体の取組傾向	35
(1) 総括	35
(2) 示唆	37
3-2. NPO 法人等の連携促進に向けた役割や取組への示唆	38
(1) 総括	38
(2) 示唆	39

1. 調査概要

1-1. 背景・目的

(1)背景

令和4年7・8月、孤独・孤立対策官民連携プラットフォームは、官民の連携に向けた基礎資料を得ることを目的に、全国のNPO法人等を対象に『孤独・孤立対策に資するNPO法人等への調査』のアンケート調査を実施した。調査の結果、令和4年10月18日公表の報告書の「4. 示唆」（P.23）に記載のとおり、下記のような示唆が得られた。

①「孤独・孤立に関する活動自認別の傾向として、活動自認がある団体が全分野で5割を超えており、分野に関わらず半数近いNPO法人等が孤独・孤立を活動において意識していると言える。他方、『第7号 環境の保全を図る活動』『第6号 観光の振興を図る活動』『第4号 学術、文化、芸術又はスポーツの振興を図る活動』の3分野は活動自認していないという回答で、他分野と比較して差異（2.91～1.74%）が見られる。よって、3分野は活動において孤独・孤立との接点を感じにくいことが想定される。また、活動の参加対象者が限定的ではない分野でもあるとも考えられる。これらから、孤独・孤立問題への取組は、生活困窮者支援等の特定の分野にこだわらず、幅広い分野の団体・参加対象者の参画や協力が得られる可能性を示唆していると言える」（報告書、P.23）。つまりは、アンケート調査より、孤独・孤立の解消を直接的な目的としていない、もしくは自認していなくとも孤独・孤立の解消につながる活動をしている団体が存在する可能性があることが示唆された。

②「連携に関しては、活動自認別の連携団体数で、自認している団体の方が連携団体数が多いことから、孤独・孤立問題は多様な機関の連携による取組が必要であることを示唆している。また、財政規模と連携団体数は比例する結果であったことから、連携団体数の多さが団体の信用度に正の影響を与え、ゆえに、更なる財源確保につながっているのではないかと考えられる。他方、組織課題で困難な課題はないと回答した団体の方が連携団体数が少ない傾向にあることから、他機関と連携せず単独で組織課題を解決できることにより、組織内外のリソースをより事業に注力させられる環境づくりに寄与しているのではないかと考えられる。ついては、既に単独で組織課題を解決できている団体の知見やノウハウを孤独・孤立に関するネットワークを通じて提供していく取組も、今後の検討事項の一つと考える。」（報告書、P.23）つまりは、NPO法人等が他機関と連携する場合に、どのような場面でどのような連携が求められているのかについては、今後継続的に調査し明らかにする必要性が示唆された。

アンケート調査で得られた上記の示唆について、「孤独・孤立の解消を直接的な目的としていなくとも孤独・孤立の解消につながる活動」を行っている団体の掘り下げを目的に、アンケート調査の補完調査の位置づけとして現地調査を行った。

(2) 本調査の目的

現地調査の目的は、アンケート調査結果から得られた示唆を踏まえ、「孤独・孤立の解消を主な目的としていないが、広い意味で孤独・孤立の解消に資する活動を行っている団体」の掘り下げを行い、好事例の発掘・取組傾向の発信を行うこと、及び自治体や他団体との課題解決に向けた連携を進めることを目指し、以下とした。

- ・「孤独・孤立の解消を主な目的としていないが、広い意味で孤独・孤立の解消に資する活動を行っている団体」が多くあることを、具体的な事例とともに発信する
- ・「思いがけず」活動が広がり、孤独・孤立の解消に資する形に発展した事例から、取組の特徴や工夫等、傾向が明らかになる
- ・更なる事業・活動の発展に向けて団体が抱える課題・ニーズ、自治体や他団体に対する期待が明らかになる
- ・アンケート調査で得られた示唆（孤独・孤立への取組に対する多様な機関による連携の必要性、連携が必要とされる場面等）を深掘りし、更なる連携促進への課題とニーズが明らかになる

1-2. 調査対象・方法

(1) 調査対象

現地調査の対象は、「孤独・孤立の解消を主な目的としていないが、広い意味で孤独・孤立の解消に資する活動を行っていると考えられる団体」とし、アンケート調査協力団体のうち3団体を抜粋、その他に好事例を有すると考えられる団体2団体を対象に加えた。また、活動分野や事例の特徴、活動地域、法人格（NPO法人、社会福祉法人等）に多様性を持たせることも考慮した。

アンケート調査協力団体においては、アンケート調査にて「思いがけず」活動が広がった事例について詳細な記述回答を得た団体の中から抜粋した。なお、その他の団体においては、インターネット検索等を通して、活動への参加を通じて孤独・孤立の解消につながった事例があったとの情報を踏まえ、対象にした。

表1 調査対象団体の名称・事業概要・事例の特徴

No	対象団体名称	項目	詳細
1	認定特定非営利活動法人 茨城 NPO センター・コモンズ	事業概要	・茨城県の 867（令和 5 年 1 月末現在）を超える NPO 法人の中間支援組織として市民活動団体の組織基盤整備を担っている ・市民活動団体の他、ひきこもりがちな市民、生活困窮者、子ども、外国人、被災者、高齢者、障害者などを対象に、セーフティネットのインキュベーション、ネットワーク化、担い手の育成、活動資源の仲介を主に行っている

			る
		事例の特徴	・誰もがフラットな関係性で気兼ねなく参加できる包摂的な場をつくることで孤独・孤立対策に資する事例 ・自治体や他団体等、多様なプレイヤーと連携しながら孤独・孤立対策に広く取り組む事例
2	認定特定非営利活動法人 キッズドア	事業概要	・子どもの貧困を筆頭に、子どもをめぐる社会課題の解決に取り組んでいる ・貧困の連鎖を断ち切るため、小学生から高校生世代まで幅広い層への無料学習会の運営を中心に、居場所支援、社会問題に対する啓発活動や政策提言までその活動は多岐にわたる ・また、コロナ禍以降、全国の困窮子育て家庭へ物資（食料・文房具）支援や情報支援、保護者への就労支援も行っている
		事例の特徴	・困窮家庭の子どもに対する学習支援・居場所の提供という本来の目的を越えて、多様な人との交流や体験活動等、孤独・孤立に陥るリスクのある子どもの社会関係資本・文化的資本の構築を通じて孤独・孤立解消に取り組む事例 ・自治体や他団体等、多様なプレイヤーと連携しながら孤独・孤立対策に広く取り組む事例
3	社会福祉法人 新発田市社会福祉協議会	事業概要	・新発田市において「福祉のまちづくり」の推進役として、住民からの様々な相談や福祉懇談会等によって地域の課題を把握し、解決に向けて住民の主体的な福祉活動の支援、新たな福祉サービスの企画や実施等行っている ・地域の団体や事業所、地域住民と連携し、地域の見守りを行う「地域みまもり隊」事業に取り組んでいる
		事例の特徴	・ボランティアのハードルを下げることで地域のリソースを広く活用することができている事例 ・参加型活動を通じて地域住民間のつながりを創出することで、孤独・孤立の予防に資する可能性を示唆する事例
4	猫町倶楽部	事業概要	・年間約 300 回の読書会を主催・運営している ・1 年間で約 9000 名、1 度の読書会に最大 300

			名参加の実績があり、参加者は10代から70代までと幅広い世代に渡る
		事例の特徴	・読書活動を通して孤独・孤立に陥るリスクのある人も参加しやすい居場所・コミュニティを形成することで、孤独・孤立の予防に資する可能性を示唆する事例
5	特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン	事業概要	・障害のある人たちが表現活動を通じて、生きる尊厳を獲得すると同時に、障害のある人たちのみずみずしい感性あふれる表現活動を通じて、社会に新しい芸術観や価値観をつくることを目的に活動している ・障害のある人たちの作品の発信、ギャラリーやスタジオの運営等を行っている
		事例の特徴	・事業/活動の対象者が広がることで、孤独・孤立対策に資する可能性を示唆する事例

(2) 実施方法

現地調査の実施形態としては、原則、各団体の活動場所を訪問し、担当者にインタビュー形式で対面でヒアリングを行い、可能な限り活動場所を視察する方針とした（対面が難しい場合はオンラインにて実施した）。所要時間については、各団体にて2～3時間の枠を調整し、ヒアリングと活動現場の視察をこの中で実施した。現地でのヒアリング・視察は特定非営利活動法人クロスフィールズが実施し、特定非営利活動法人日本NPOセンター・内閣官房・一般社団法人RCFが一部同行した。

ヒアリング時の質問項目は下表のとおりである。なお、実際のヒアリングでは各団体の事業内容や事例の特徴に合わせて質問を調整している。

表2 ヒアリングの質問項目（例）

テーマ	質問項目
団体概要	・創業年・創業背景・職員数
事業概要	・事業内容・事業規模・対象者層 ・過去数年間（コロナ前後）の対象者層の変化の有無 ・対象者層へのアウトリーチ方法 ・事業運営体制（組織内の体制、ボランティアの活用有無等） ・ボランティア参加者層 ・過去数年間（コロナ前後）のボランティア参加者層の変化の有無 ・ボランティア参加者層への情報発信方法

行政・他団体との連携	・連携の有無及び具体的な内容 ・連携に至った背景 ・連携による効果・得られたこと ・更なる連携へのニーズ・課題
「思いがけず」孤独・孤立対策への効果が見えた事例	・事例の詳細 ・なぜそれが起こったのか、なぜうまくいったと考えるか ・どのように広報/募集/発信等を行ったのか ・なぜその活動・発信内容が対象者（例：ひきこもり者）に響いたのか ・普段とは異なるサポートやフォローアップ等の有無 ・活動への参加を通じて対象者（例：ひきこもり者）にどのような変化・反応があったか ・活動への参加を通じて周囲（例：他参加者、運営スタッフ、団体等）にどのような変化があったか
孤独・孤立対策への寄与	・団体の視点から孤独・孤立の課題をどう捉えているか ・団体の事業が孤独・孤立の対策や解消に寄与し得ると感じるか ・団体の事業を孤独・孤立の対策や解消に資するものに発展させていきたいか、その場合理想とする事業の形・あり姿はどのようなものか ・事業を発展させる上で自団体では解決できない課題はあるか、それは何か ・事業を発展させるために行政や他団体とどのように連携していけるとよいか

(3) 調査実施概要

現地調査の実施期間としては、準備・報告書作成を含めて以下のスケジュールで実施した。各団体の調査実施日程は下表を参照。

- ・令和4年11月上旬～下旬：調査準備
- ・令和4年12月上旬～令和5年1月下旬：調査実施
- ・令和5年2月上旬～下旬：報告書まとめ

各団体の現地調査は以下の日程・場所・参加者にて実施した。原則、各団体2～3時間でヒアリング・視察を実施しているが、例外として、新発田市社会福祉協議会は活動実施団体である2団体のヒアリングを分けて行い、猫町倶楽部はヒアリングと視察を2日間に分けて実施した。

表 3 各団体の調査実施内容

No	対象団体（調査内容）	項目	詳細
1	認定特定非営利活動法人 茨城 NPO センター・コモンズ （ヒアリング・現場視察）	日時	令和 4 年 12 月 12 日 10:00～12:00
		場所	茨城 NPO センター・コモンズ常総事務所
		参加者	・認定 NPO 法人茨城 NPO センター・コモンズ 大野覚、小鷹美代子、横田能洋（後半のみ参加） ・日本 NPO センター 吉田建治 ・RCF 浦山泰之 ・クロスフィールズ 西川紗祐未、中村翠（記録）
2	認定特定非営利活動法人 キッズドア （ヒアリング・現場視察）	日時	令和 4 年 12 月 16 日 15:00～17:00
		場所	キッズリビング
		参加者	・認定特定非営利活動法人キッズドア 安達空良 ・内閣官房 吉川晃 ・クロスフィールズ 西川紗祐未（記録）、中村翠
3	社会福祉法人 新発田市社会福祉協議会 ※二つの活動実施団体の調査を分けて実施		
	①新発田市社会福祉協議会・ 新発田郵便局 （ヒアリング・現場視察）	日時	令和 5 年 1 月 17 日 13:00～14:20
		場所	新発田市社会福祉協議会
		参加者	・新発田市社会福祉協議会 地域福祉課 川瀬聖志、後藤圭一 ・新発田郵便局 総務部 永井高明 ・クロスフィールズ 西川紗祐未、鈴木園子（記録）
	②新発田市社会福祉協議会・ 天王元気会 （ヒアリング・現場視察）	日時	令和 5 年 1 月 17 日 14:50～15:15
		場所	天王集落研修センター
		参加者	・新発田市社会福祉協議会 地域福祉課 川瀬聖志、後藤圭一 ・天王元気会 刈谷敏男、高橋智恵子、加藤毅、磯部實、原一雄、高橋ツヤ子、

			渡辺洋子 ・民生委員児童委員 高橋会 ・クロスフィールズ 西川紗祐未、鈴木園子(記録)
4	猫町倶楽部 ※2 日間に分けて実施		
	①代表山本氏 (ヒアリングのみ)	日時	令和 5 年 1 月 16 日 14:00～16:00
		場所	オンラインにて実施
		参加者	・猫町倶楽部 山本多津也 ・日本 NPO センター 吉田建治 ・クロスフィールズ 西川紗祐未、鈴木園子(記録)
	②活動参加者 (ヒアリング・現場視察)	日時	令和 5 年 1 月 21 日 14:00～14:45
		場所	猫町倶楽部 東京活動拠点
		参加者	・猫町倶楽部 参加者 加藤伸一 ・猫町倶楽部 参加者 なぼ(猫町倶楽部で使用のニックネーム) ・猫町倶楽部 参加者 他 3 名(途中参加、匿名のため ABC で記載) ・クロスフィールズ 西川紗祐未、鈴木園子(記録)
5	特定非営利活動法人 エイブル・アート・ジャパン (ヒアリング・現場視察)	日時	令和 5 年 1 月 20 日 13:00～16:00
		場所	せんだいメディアテーク(仙台)
		参加者	・エイブル・アート・ジャパン 柴崎由美子 ・クロスフィールズ 西川紗祐未、鈴木園子(記録)

2. 調査結果

2-1. 認定特定非営利活動法人 茨城 NPO センター・コモンズ

【団体概要】

- ・団体名：認定特定非営利活動法人 茨城 NPO センター・コモンズ
- ・HP：<http://www.npocommons.org/index.html>
- ・創業年：平成 10 年
- ・活動拠点：茨城県水戸事務所・常総事務所・土浦事務所
- ・事業概要：
「様々な課題当事者が社会的に包摂され、多様性が尊重され、人や組織がつながりともに行動する市民社会」をビジョンに掲げる茨城県の中間支援団体。ひきこもりがちな市民、生活困窮者、子ども、外国人、被災者、高齢者、障害者、またそれら市民を支える地域社会の民間非営利団体等を対象として、①セーフティネットのインキュベーション、②ネットワーク化、③担い手の育成、④活動資源の仲介に取り組む。

(1) 「思いがけず」孤独・孤立の解消に寄与した好事例とその特徴

<好事例の紹介>

茨城 NPO センター・コモンズ（以下、コモンズ）では、「思いがけず」孤独・孤立の解消に寄与した事例として、以下二つの事例が挙げられる。

事例①：「ひきこもり支援×山林整備活動」によるひきこもり者の変化の事例

コモンズは日本 NPO センター、損保ジャパンと連携実施している「SAVE JAPAN プロジェクト」の一環として、里山保全に取り組む NPO 環～WA と協働で、生物多様性保全・里山保全を目的とした山林整備活動のイベントを一般市民向けに開催した。コモンズは、この活動にひきこもり者が参加することは外に出て新しい体験をする機会になると考え、自団体のひきこもり者支援事業を通して接点のあるひきこもり者や不登校の子どもに声をかけた。結果、イベントには 10 代から 60 代の一般参加者に加え、数名のひきこもり者と不登校の中学生とその親が参加した。

イベントでは、ひきこもり者や不登校の中学生が、木を切って集める作業に率先して取り組む様子が見られた。参加したひきこもり者 1 名はこのイベント後、コモンズが運営する他の交流イベントにも参加するようになった。

事例②：「ひきこもり支援×地域の農業体験」によるひきこもり者の変化の事例

コモンズは、子ども食堂の支援に関心を持つ地域の若手農家のネットワークとの連携事業の一環として、生姜農家と協働で農業体験を実施した。この生姜農家が生産ロスで出た食材を子ども食堂支援に活かすことに関心があること、人手不足の問題を抱えていたことをコモンズは

把握していた。そこで、農家が抱える課題とひきこもり者が抱える課題を掛け合わせて両者の課題解決ができないかと考え、農家にこの企画を提案した。

コモンズの声かけにより、農業体験には一般参加者やボランティアのジョブトレーナーとともに数名のひきこもり者が参加した。中には30年以上ひきこもり状態にあった人がおり、その人は80代の母親とともに参加した。その人は、生姜の収穫作業を黙々と行っていた。最初はことばを発することがなかったが、「大丈夫？」などの参加者からの声かけに対して徐々に応えるようになった。作業終了後、参加者全員で円陣になって感想を述べあった際、円陣には入ることができなかった。しかしながら、この活動がきっかけとなり、コモンズで行っている農家での月1回の農作業や生協の荷積みなどの就労体験を行うなど、社会とのつながりが少しずつ広がってきている。

<好事例の特徴>

上記で挙げられた事例について、共通して以下のような特徴が見られる。

■孤立状態にあった人の社会や他者との接点がつくられた

上記二つの事例では、社会から孤立状態にあった人が、コモンズの活動への参加を通して、外に出て社会や他者と接点をもつことができたことが共通して見られる。

事例①では、ひきこもり者や不登校の中学生が、外に出て、多様な世代の一般市民と混ざり、山林整備活動という新しい体験することができた。イベント後、ひきこもり者1名は他の交流イベントにも参加するようになり、外に出て人と交流する機会が増えた。

事例②では、30年以上ひきこもり状態にあった人が、外に出て、農家や一般市民とともに農作業に取り組むことができた。最初はことばを発することがなかったが、参加者からの声かけに徐々に応えていくようになったことから、他者との関わり方に変化が見られたとコモンズは考えている。さらにその参加者は、この農業体験をきっかけに、別の農家で定期的に仕事を手伝うようになる等、外出の機会が増えた。

以上のように、コモンズの活動をきっかけに、当初は孤立状態にあった人が、社会や他者との新たな接点を持つことができていると考えられる。

<特徴に見られる団体の工夫>

上記の特徴を発揮するために、団体側は下記の工夫を凝らしている。

■他団体と連携して新たな体験をつくりだしている

第一に、他団体と連携することで、孤立状態にある人にとって新たな体験をつくりだしている点が挙げられる。例えば事例①では、里山保全に取り組むNPO団体と協働したことにより、山林をフィールドにしたイベントが実現し、ひきこもり者や不登校の子どもに自然と触れ合いながら他者と接点をもつ体験をつくり出すことができた。事例②においては、生姜農家や子ども食堂と連携したことにより、ひきこもり者に対して農業体験の機会をつくりだすことができた。このように、他団体と連携するという工夫が、孤立状態にある人にとって新たな体験をつくりだし、特徴として挙げた社会や他者との接点を生み出していると考えられる。

コモンズが他団体との連携を生み出す際に特に意識していることは、お互いにとって意義があること・お互いが抱えている課題の解決につながる”Win-win”な形をとることである。例えば事例②では、コモンズが地域貢献に関心のある農家の人手不足の課題に着目し、地域の子どもや人々に農業に関心を持ってもらうための施策として農業体験とひきこもり者への機会創出を掛け合わせるに至った。

また、コモンズは、現場への訪問や直接対話することを通して、相手の状況や課題を把握することを大切にしている。事例②で農家の人手不足の課題を把握していたのは、子ども食堂支援に関心を持つ若手農家のネットワークとのつながりを日頃から大切にし、農家が集まる集会に顔を出し、対話を重ねていたからだという。

■孤立状態にある人に役割をつくりだす

第二に、ひきこもり者等の社会から孤立状態にある人も含め、活動に関わる全ての人に役割をつくりだしている点が挙げられる。上記の二つの事例では、山林整備や農作物の収穫という役割がひきこもり者を含む全参加者に与えられているが、コモンズの日々の活動も役割をつくりだすことを徹底している。例えば、コモンズ施設の中では、在住外国人や精神障害者等、地域の中で孤立状態にある人にそれぞれの役割が与えられている。役割は、壁紙の張替え・料理・ヤギの散歩等である。

コモンズが役割をつくりだすことを意識する理由は、孤立状態にある人にとって、役割を持つことが社会と接点を持つきっかけの一つになると考えているからである。具体的には、役割を担い全うすることが自己肯定感の醸成や「自分は必要とされている」という実感につながる。これらの成功体験を積み重ねる過程で、徐々に社会と接する自信と機会が生まれるという。

また、コモンズは孤独・孤立の課題を抱えた人を「支援対象者」と位置付けることはしない。その人の好きなこと・経験・特性に着目し、様々な出番をつくりだすことを常に意識しているという。

このように、孤立状態にある人にも役割をつくりだすという工夫が、社会や他者との接点、また思いもかけない一面を確認できたり、思いもかけない本人の成長、好循環の創出に活かされている。

(2)連携事例及び連携ニーズ・連携における課題

コモンズによる連携事例と連携ニーズは下記のとおりである。

■NPO 団体・企業・農家等の地域の事業所との広い連携事例

コモンズは、他の NPO 団体や企業、農家等の地域の事業所と広く連携している。上記の事例が示すとおり、他団体や農家等の地域の事業者と広く連携することで、ひきこもり等の課題を抱えた人々に対し、自団体だけでは実現できない様々な場や機会を創出している。

コモンズは本業の取組の中でも、地域の団体や事業所とつながる機会を積極的につくっている。例えば、フードバンク茨城を設立する過程でも、生協とのつながりを活かして社会的擁護の若者による農作物の収穫体験を創出したり、福祉課題に取り組む地域の NPO 団体について自

ら調査を実施し、まとめた情報を福祉相談機関を通じて当事者に届けるといった活動等が挙げられる。また、茨城の地域円卓会議の事務局を十数年前から担当し、行政や企業等の他セクターと様々な地域課題について話す機会を定期的に設定している。

加えて、コモンズは自団体の広報に注力し、マス・メディアを通じた発信も毎月の頻度で行っている。この発信の効果により、WEB 検索で企業等から問い合わせを受けることがあるという。

連携が生まれるきっかけについては、団体や事業所からの何気ない相談や会話が多く、最初から連携ニーズについて相談を受けるケースは多くないという。コモンズが工夫している点の一つとして、他団体と直接対話を重ねることを意識していると上述したが、中間支援を専門としている団体としては、団体との接点を多く設け、相談窓口としての信頼を獲得し、何気ない会話の中から新たな連携の糸口や提案を生み出すことが重要であるとコモンズの大野氏は言う。



常総事務所でのヒアリングの様子

2-2. 認定特定非営利活動法人 キッズドア

【団体概要】

- ・団体名：認定特定非営利活動法人 キッズドア
- ・HP：<https://kidsdoor.net/>
- ・創業年：平成 19 年
- ・活動拠点：東京都、千葉県、埼玉県、宮城県
- ・事業概要：

子どもの貧困等、子どもをめぐる社会課題の解決に取り組む。1900 人近くの小学生から高校生世代まで幅広い層への無料学習会の運営を中心に、居場所支援、社会問題に対する啓発活動や政策提言等を行っている。令和 2 年からは、全国の困窮子育て家庭約 3000 世帯を支援するファミリーサポート事業を開始、情報支援・物資支援・保護者への就労支援も実施。

※キッズリビングについて：

本調査では、キッズドアが東京都足立区より委託を受けて運営するキッズリビングにヒアリングを行った。キッズリビングは、就学援助受給世帯、ひとり親世帯、生活保護世帯等の他、様々な福祉的課題を抱える子どもたち（主に中学 1 年生から高校生）を対象に、居場所支援や学習支援、キャリア（体験活動）支援、家庭への支援等四つの支援の柱で子どもたちの自立を目標に事業を行っている。

本章ではキッズリビングのヒアリングから得られた内容を抜粋しているため、「キッズリビング」と記載している。第三章ではキッズドア全体の取組を指すため、「キッズドア」と記載している。

(1) 「思いがけず」孤独・孤立の解消に寄与した好事例とその特徴

<好事例の紹介>

ヒアリングを実施したキッズリビングでは、「思いがけず」孤独・孤立の解消に寄与した事例として、以下三つの事例が挙げられる。

事例①：孤立しがちだった子どもが、他者との共通体験を通じて友達作りができた事例

キッズリビングでは子どもの学習支援に加え、企業での職業体験や保育園でのボランティア、音楽鑑賞、多様な経験を持つ社会人との交流等の体験活動を定期的に実施している。これは、本来は子どもの将来的な自立とそのための社会関係資本の醸成を目的としたものである。一方、キッズリビングに通う子どもの中に、孤立しがちで友人との関係作りが苦手な子どもがいた。当初は他者に対し何を話してよいかわからない様子であったが、キッズリビングの体験活動に参加したことがきっかけで、同じ体験をした子どもと対話する機会が生まれ、その結果友人関係を築くことができた。

事例②：支援される側だった子どもが、卒業後にボランティアとして戻ってきた事例

キッズリビングでは、支援が必要な子どもに自己表現の機会を設けることを目的に様々な活動を行っている。その一例がキッズリビングで年に一度実施している「総選挙」という活動である。

「総選挙」では、子どもたち全員が「よりよい居場所を作るためにできること」について意見箱に意見を入れる。その意見を基に子どもたちの中から立候補者が立てられ、政党が作られる。全員による投票を基に、キッズリビングの中での今後の取組が決まり、子どもたちにより実行される。

この活動を通し、子どもたちは、まず自己表現する機会が与えられることで、「自分はここにいてよい」と実感し、承認欲求が満たされる。次に、自分の行動の周囲への影響を認知することで「自分は誰かの役に立っている」と感じる。この自己有用感の実感が、外の社会と関わり他者に貢献する意欲の醸成につながる。キッズリビングは、この自己承認・自己有用感の実感・社会や他者貢献への意欲の醸成が、子どもの自立においては重要だと考え、総選挙のような活動を行っている。

近年では、キッズリビングの卒業生が大学生や社会人になり、「今度は自分が後輩を支える側になりたい」という理由から、ボランティアとして戻ってくる事例が多く見られるという。このように支える側として社会と接点を持つことこそが、他者への貢献実感や社会への帰属意識の醸成につながり、孤独・孤立の予防に資するのではないかとキッズドア安達氏は考えているという。

事例③：地域の中でのゆるやかな連携が気づきの目を増やした事例

キッズリビングは、地域他団体や事業所と広く連携しており、その一例が子ども食堂が主催する即売会である。即売会とは、子ども食堂が定期的に主催する食材等を販売する催しであり、ここに多くの近隣地域の住民が買い物をして訪れる。

キッズリビングは以前より、開所していない際の食事の支援などで子ども食堂と連携してきた。次第に、即売会の運営者も含めた子ども食堂の関係者も、キッズリビングの子どもと関わりをもつ中で、地域の課題や、支援が必要な子どもや家庭が身近にいるということを知るようになった。即売会の運営者は、買い物客と顔を合わせる際に意識的に挨拶や声かけをするようになり、名前は知らなくてもお互いを認知できる関係性を築いていった。また、買い物客や周辺の住民の何らかの異変に気づいたり、会話の中で困っている家庭の話が挙がった際には、手を差し伸べる意識をもっているという。実際に、即売会の運営者から、居場所支援や学習支援を必要としている家庭の紹介の連絡がキッズリビングに届いたこともあった。

<好事例の特徴>

上記で挙げられた事例について、共通して以下のような特徴が見られた。

■他者との共通体験を得る

第一の特徴は、キッズリビングでは他者との共通体験を得る機会が多く設けられている点である。共通体験とは、他者と同じ体験をすることを指す。

事例①では、当初は孤立しがちであった子どもが、同じ体験活動に参加した子どもと友人関係を築くことができたことについて触れた。この子どもが友人との関係を作ることができた理由は、話題を探すのに困ることなく、ともに参加した体験活動について、感想等を共有しあうことができたからである。つまり、共通体験を得られたことが、他者と関係を築く上では有効な手段になったと考えられる。

事例②では、キッズリビングでの総選挙の活動について触れたが、この活動では全員がよりよい居場所を作るために意見を出し、活動に取り組むという役割が与えられた。つまり、全員が居場所の運営に関わるという共通体験を得られるものであった。この体験においては、子どもは自己表現の機会を与えられ、周囲に認められることで「自分はここにいてよい」という実感を得ることができたという。この実感が、子どもの自己有用感や他者貢献への意欲の醸成にもつながった。

このようにキッズリビングが提供する他者との共通体験が、他者との関係構築や「自分はここにいてよい」という実感につながっていると考えられる。

■地域の事業所や住民に「見守り」の意識が醸成される

第二の特徴として、キッズリビングとの連携を通して、地域の事業所や住民が、地域における課題を知り、支援が必要な人への「見守り」の意識の醸成につながっている点が挙げられる。

事例③では、子ども食堂の即売会の運営者が、キッズリビングとの関わりを通じ、地域の課題や、支援が必要な子どもや家庭が身近にいることを知ったことにより、即売会で顔を合わせる地域住民にも意識を向けるようになった。例えば、遅い時間に一人で帰宅している子どもに気づいたり、住民との会話の中で困っている家庭の情報が挙がった際には、手を差し伸べる姿勢をもっている。実際に、即売会での口コミが、キッズリビングへの問い合わせにつながった事例も挙げられた。身近な人に意識を向け、支援が必要な人に気づき、必要であれば手を差し伸べるという「見守り」の意識が、キッズリビングとの関わりがきっかけとなり、地域の事業所や住民の中にも醸成されたと考えられる。

＜特徴に見られる団体の工夫＞

上記の特徴を発揮するために、団体側は下記の工夫を凝らしている。

■多様な人や価値観との出会いをつくる

第一に、子どもたちが多様な背景を持つ人や価値観と出会う機会を多く設けている点が挙げられる。事例①でも触れたとおり、子どもたちに企業での職業体験や保育園でのボランティア、音楽鑑賞、多様な経験を持つ社会人との交流等の体験活動の機会を提供している。この体験活動が、上述のとおり、一つ目の特徴である他者との共通体験を得る機会につながっている。

キッズリビングがこのように工夫している理由は、キッズリビングは子どもの将来的な自立を活動目的に置いており、多様な背景を持つ人や様々な価値観と出会うことが、自立においては重要であると考えているからである。具体的には、子どもが多様な人と価値観に触れること

で、社会は多様であると認識し、社会の中の自分の存在を認められる経験を得ることができ、この経験が自立に向かう上では重要であるという。特に、キッズリビングに通う困窮家庭や不登校の子どもは、地域の中での人間関係が狭くなりがちであり、多様な体験活動の機会や環境が不足している。この不足している機会や環境を補うという意味でも、キッズリビングは、多様な人や価値観との出会いの機会提供に注力している。

さらには、多様な背景を持つ人や価値観と出会う機会を作るために、キッズリビングは企業や地域の他団体、事業所等、様々な機関との連携している点も特徴的である。事例①では、企業や保育園と連携を通じた体験活動、事例③では、地域の子ども食堂との連携を通じたパントリーや学習支援の場所の利用が挙げられた。

■全員に役割をつくる

第二に、所属する全ての子どもにあらゆる場面で役割をつくりだしている点が挙げられる。事例②で触れたように、総選挙の活動においては、全員がよりよい居場所作りのために意見を表明し、自分たちで決めた活動に取り組むという役割を与えられている。そして、この工夫が特徴として挙げた共通体験を得る機会につながっている。その他、役割をつくる例として、「居場所コーディネーター」という役割を担う子どもが執行役となり、図書管理や食事、イベント運営のサポート等、居場所運営のための役割を他の子どもに割り当てているという。

このように工夫している理由は、子どもが将来的に自立して社会に出るためには、本人が「自分が社会に貢献できる」という意志をもつことが重要であり、自身が社会の中で役割を果たし、成功体験を重ねることで、この意志が醸成されると考えているからである。具体的には、キッズリビングという「小さな社会」の中でまずは役割を担い、この社会に貢献する成功体験を積むことで、自己承認・自己有用感を実感し、他者や社会に貢献したいという意欲が生まれるという。実際に、卒業生が「今度は自分が後輩を支える側になりたい」と感じ、ボランティアとして戻ってきたことから、キッズリビングで役割をもった経験が、自立につながったことが分かる。

■地域の多様な団体・事業所と広くゆるい関係性を構築する

第三に、地域の多様な団体や事業所と広くゆるい関係性を構築している点が挙げられる。事例③でも触れたが、キッズリビングは子ども食堂や即売会の運営者をはじめ、近隣の特別養護老人ホームや団地の自治会等ともゆるくつながり連携しているという。

キッズリビングが地域の多様な団体や事業所とのゆるい関係性構築を意識している理由は、支援を必要としている子どもへのアウトリーチに有効だと考えているからである。事例③で即売会の運営者の口コミが居場所支援や学習支援を必要としている家庭の問い合わせにつながったように、地域の住民や多様な団体、事業所とのゆるいつながりを通じた見守り活動に取り組むことで、何かがあったときにいつでも手を差し伸べられる環境が作られている。たしかにエンドユーザーである子を持つ家庭に情報を届け認知度を上げることも重要だが、それ以上に地域の団体、自治会、事業所等を通じた発信・紹介の方が圧倒的に波及効果が高いという。そして、このようなゆるい連携が、地域の事業所や住民の「見守り」の意識の醸成につながっているという。なお、ゆるい関係を構築する上では、挨拶をする、声をかける、ともに足りないも

のを連携して補い合い助け合う等、日常の中で地域の様々な関係者とつながっておくことを意識している。

(2)連携事例及び連携ニーズ・連携における課題

キッズリビングによる連携事例と連携へのニーズは下記のとおりである。

■自治体の多様な機関を通じた支援対象者へのアプローチと支援体制

キッズリビングは足立区のスクールソーシャルワーカーやケースワーカーなどを通じて、支援を必要とする対象者に対して、アプローチをしている。アプローチの他にスクールソーシャルワーカーと定期的に連絡会議を設けたり、学校訪問をしたりして情報共有をする体制を構築している。

■企業との連携による職業体験やオフィスツアー等の実施

事例①でも触れたが、キッズリビングでは企業と連携した体験活動を実施している。企業は食品系メーカーや衣料品メーカー等があり、オンラインで店舗や本部の人に話を聞いたり、オフィスツアーや店舗見学、職業体験等の活動が挙げられた。

連携に至った経緯としては、企業側から声がかかるケースが多いという。近年、SDGsに関心を持ち、子どもの貧困課題の解決に関わる活動の一環として連携を希望する企業が増えていることも背景に挙げられた。企業としてもどのような貢献ができるかわからない状態で声がかかることが多く、キッズリビング側から企業の連携方法を検討し提案するケースが多い。



キッズリビングでのヒアリングの様子



教室内の様子

2-3. 社会福祉法人 新発田市社会福祉協議会

【団体概要】

- ・ 団体名：社会福祉法人 新発田市社会福祉協議会
- ・ HP：<https://shibata-shakyo.or.jp/>
- ・ 創立年：昭和 27 年
- ・ 活動拠点：新潟県新発田市本町 新発田市ボランティアセンター内
- ・ 事業概要：

誰もが住み慣れたまちで安心して生活することのできる「福祉のまちづくり」の実現を目指す団体。地域住民やボランティア、福祉・医療・教育等の関係機関と協力しながら、①少子高齢化や障害者に対応した地域での支え合いづくり、②健やかな子育てと若者世代への支援、③住民主体による健康増進や介護予防活動の推進、④地域での防災・防犯力の強化や避難行動要支援者への支援、⑤利用者のニーズに応じた福祉サービスの量と質の確保に重点的に取り組む。

(1) 「思いがけず」孤独・孤立の解消に寄与した好事例とその特徴

<好事例の紹介>

新発田市社会福祉協議会（以下、新発田市社協）では、「思いがけず」孤独・孤立の解消に寄与した事例として、以下の事例が挙げられる。

事例①：見守り活動が思いがけず地域の企業・事業所・住民に広がった事例

新発田市社協は、4 年間かけて地区福祉活動計画を策定していく過程で、地域住民との対話から課題に挙がった見守り活動を平成 27 年に事業化した。「地域みまもり隊」と呼ばれる活動の登録数は、令和 4 年 2 月時点で、団体・事業所が 168 団体（1,720 人）、個人が 130 世帯（152 人+3 匹）であり、特に企業の登録数は予想していた以上に多いという。

登録企業の一つである新発田市の郵便局は、市内にある全 19 局が地域みまもり隊に登録している。郵便局員は配達業務をしながら見守り活動を行い、気づいた異変について開示できる範囲で新発田市社協に情報提供を行う。市内を広く回る郵便局の強みを活かした地域連携の形であること・配達しながら異変に気づくことができる活動形態であること・情報共有の体制が整っていることから、郵便局は活動への協力を決めたという。

地域のサロン団体である「天王元気会」は団体で地域みまもり隊に登録をしている。人生を楽しむためのレクリエーションが本来の活動であるが、地域のために何かをしたいという想いを持って、小学生の登下校の見守り・空き家点検・独居高齢者の訪問といった見守り活動を実施している。見守り活動は早起きや外出といった健康維持にもつながるため、活動を継続しているという参加者もいる。

＜好事例の特徴＞

上記で挙げられた事例について、以下のような特徴が見られる。

■視点の変化を通じた「気づきの目」の醸成

第一の特徴は、見守り活動を通して身近に見守りが必要な人がいるという新たな気づきを得ることで、活動に参加する地域住民の地域に対する意識が変化する点である。

見守り活動の目的は、一人暮らしの高齢者・寝たきりの家族を一人で介護している人・周りに相談相手のいない子育て中の人等、SOS が出せずに地域の中で孤立しがちな人たちを見逃さずに気づくことである。新発田市社協は地域ぐるみでの見守りが必要な人はどのような人か、日常の小さな変化に気づくためにはどのような視点を持つとよいかを発信することで、見守り活動に関わる人々の「気づきの目」の醸成に取り組んでいる。

例えば、ゴミ拾いをする人や防犯対策のため地域を見回る人がこれらの視点を持つことで視野が広がり、本来の活動以外にも目を向けるようになるという。視野が広がると、見守りの対象である一人暮らしの高齢者や認知症の人を気にかけるようになる・洗濯物が干しっぱなしである状態を異変と認識するようになるといったことができるようになる。さらに気づいた異変を放置せず、地域みまもり隊員に配布されている「ご近所見守り確認リスト」にしたがって相談・報告といった行動を取るという。

また天王元気会のメンバーは、高齢者宅の訪問を通じて、民生委員が訪問の対象としていない家族と同居中の高齢者も昼間は家にひとりで居ることに気づいた。そのような高齢者も孤独状態であると認識し、見守るようにしているという。

このように、新発田市社協からの発信を通じて地域住民は気づきの目を養い、見守り活動を通して、地域住民は身の周りにも孤独状態な人がいるという意識を持つことができています。

■見守り活動を通して地域への関わりしろ（＝役割）ができる

第二の特徴は、見守り活動を実施する人が、活動を通して地域との関わりを感じることや役割を担うことができる点である。

例えば郵便局員は、担当区域へ毎日配達に行くため、住民等への挨拶等を通して地域の異変に気づくことはこれまでもあったという。地域みまもり隊に参画したことで、これらが「見守り活動」と認識され、気づいた異変を総務部に報告できるようになった。報告された異変はまとめて総務部から新発田市社協に報告され、後日回答が報告者に届くことになっている。新発田市郵便局で見守り活動を統括する総務部長によると、配達員は自分が提供した情報への返答を通して地域みまもり隊としての役割を実感でき、それによって地域貢献への意識が上がり、郵便局が注力する認知症サポーター養成講座への応募やより精力的な見守り活動につながっているという。

天王元気会のメンバーも、見守り活動を通して地域と接点を持つことで、地域における自身の存在意識や地域への帰属意識を強めている。例えば高齢者宅の訪問を通して「自分たちも将来は同じ境遇かもしれない」や「家に籠っている人に外に出てほしい」という気持ちが生まれ、見守り活動の継続につながっているという。また、登下校の見守りや空き家点検の裏には「子どもたちに天王を好きになり、住み続けてほしい」という想いがあるという。活動への参

加頻度は個人の自由だが、見守り活動を通じた地域貢献の思いがメンバー間に醸成され、元気会として活動が続けることにつながっている。

■「ながら活動」

第三の特徴は、見守りは「ながら活動」であるという点である。

新発田市社協は、見守りをする人が忙しさやプレッシャーを感じることなく「ながら」で活動できることを重視している。その結果、参加者は単独で無理なく活動を行うことができる。例えば郵便局員は通常業務に見守りの意識を加えることで見守り活動ができ、天王元気会のメンバーは自身の健康維持のために見守り活動に参加することができる。

地域みまもり隊の活動には、例えば月に1回挨拶をするというようなルールや報告件数のノルマは存在しない。運営者である新発田市社協は、焦らない姿勢や活動成果を求めない姿勢を取り、隊員に対して見守り活動を強要するような仕掛けはしないという。やりたい人がやりたいときに見守り活動ができる輪に、誰でも気軽に入ることができる。

このような考えから、新発田市社協は誰でも気軽に地域みまもり隊に登録することを歓迎している。登録後に無理なく見守り活動を行うことを待つ姿勢に加え、登録をきっかけに生まれる新しいつながりを大切にしているという。活動の活発さを重要視しない「ながら活動」により緩いつながりが地域に生まれている。

運営者として「ながら活動」を重視する意図には、異変に気づく人は近くの人であり、気づける人が近くにいることが予防効果を大きくするという考えがある。住民や企業等できるだけ多くの人に「ながら活動」として見守りに参加してもらい、気づきの目をネットワークで生み出すことを目指している。実際、郵便局は通常業務の延長で見守り活動をしているようだが、広範囲で活動する郵便局が「ながら活動」で行う見守りの貢献度は高いという。

<特徴に見られる団体の工夫>

上記の特徴を発揮するために、団体側は下記の工夫を凝らしている。

■情報発信

孤立しがちな人を見逃さない見守り活動を地域に浸透させるため、新発田市社協は工夫した情報発信を行っている。見守り活動そのものに関心を持つ人は少ない傾向にあるため、相続や防災等他の目的で接点を持った人々に対して、見守り活動を紹介しているという。天王元気会は、新発田市社協の勉強会で地域みまもり隊のことを知り、何かできることがありそうだと思うことで活動に参加することになった。誰でも気軽に始めやすい活動として広く発信することで、情報を得た人から「まずは登録してみよう、やってみよう」が生まれている。間口の広さに加え、地域みまもり隊のハンドブックや隊員の心得があることも、活動内容の理解につながっている。

地域みまもり隊員に対しては、地域みまもり隊の集いを年に1回開催している。情報と事例の共有や基調講演を行い、隊員が学び合う場を創っている。見守り活動は個人や団体が独立して実施できることが特徴だが、地域みまもり隊としての一体感の醸成や隊員の意識向上も目的としているという。

この工夫は、視点の変化を通じた「気づきの目」の醸成に寄与していると考えられる。

■仕組化

新発田市社協は「ながら活動」にこだわるが、見守り活動の仕組みは以下のように確立させている。

- ・見守りとは：監視のように相手を常に意識的に観察するのではなく、日常生活等の中で接点を持ったときに、相手の印象について感じたことを心に留めておくこと
- ・異変とは：新聞や郵便物がたまっている、夜になっても灯りがついていない、洗濯物が干したままになっているなど普段との違い
- ・見守りの対象：ひとり暮らし高齢者や高齢者のみの世帯、認知症の人、障害のある人、寝たきり家族を一人で介護している人、周りに相談相手のいない子育て中のお母さん等「地域のなかで孤立しがちな人たち」
- ・異変に気づいた際の対応：判断に迷った際は「ご近所見守り確認リスト」を確認、緊急度に合わせた連絡先に報告・相談する

以上のように、孤立しがちな人を見逃さず関係機関に報告する仕組みがある上で、見守り活動は「ながら」でできる特別なものではないことが強調されている。この工夫が、より多くの人が「ながら」での見守り活動を通して「気づきの目」を醸成することや地域への関わりしるを持つことにつながっている。

加えて、地域みまもり隊は配布された腕章をつけて見守り活動を行う。地域の人に声かけを率先してできるようにと作られた、市と新発田市社協の名前が入った腕章が、地域みまもり隊と地域住民、地域みまもり隊同士のつながりや支え合いを生み出す仕組みの一助となっている。新発田市社協はまた、地域みまもり隊は地域から注目される「みまもられ隊」でもあると考えるため、腕章は見守り活動をする人が「地域における役割」に加えて「地域への帰属意識」を実感できる工夫でもあると考えられる。

(2)連携事例及び連携ニーズ・連携における課題

新発田市社協による連携事例と連携ニーズは下記のとおりである。

■新発田市役所との連携事例

新発田市社協の「地域みまもり隊」は、新発田市との共同事業である。新発田市とは、年1回の地域みまもり隊の集いの共催や地域みまもり隊登録者の情報共有等を行っている。新発田市社協によると、市との共催事業にすることで、地域住民からの信頼を獲得しやすいという。

また新発田市は、市と連携協定を締結している企業に対して、地域みまもり隊の情報を発信・紹介している。例えば新発田市内の郵便局は、新発田市からの紹介で見守り活動に参加することになった。このように、新発田市は見守り活動を企業との連携事業を推進する手段にすることができている。

■行政への連携ニーズ

新発田市社協は、行政の強みは信頼と安心であると考え、行政がその強みを認識してうまく活用することを期待する。今後も同じ目標を持って協働していくために、現場に触れることや共通体験を持つことを通じて、ミッションを共有していくプロセスを大切にしたいという。



天王元気会へのヒアリングの様子



天王元気会へのヒアリングの様子

2-4. 猫町倶楽部

【団体概要】

- ・ 団体名：猫町倶楽部
- ・ HP：<https://nekomachi-club.com/>
- ・ 創業年：平成6年
- ・ 活動拠点：全国
- ・ 事業概要：

①読書というインプットを、読書会というアウトプットで一層深める、②読書会場で多様な人の思考に触れ、新しい視座を得る、③新しい視座が、新しい本、新しい世界へとあなたを導く、この循環によって、読書による学びを一生涯続けていくことを理念に、年間約300回の読書会を主催している。

(1) 「思いがけず」孤独・孤立の解消に寄与した好事例とその特徴

<好事例の紹介>

猫町倶楽部では、「思いがけず」孤独・孤立の解消に寄与した事例として、以下二つの事例が挙げられる。

事例①：ひきこもり者が読書会への参加を通じて変化した事例

40代のひきこもりがちだった男性が、著名な文筆家のゲスト出演をきっかけに猫町倶楽部の読書会に参加するようになった。当初はコミュニケーションが全くできないため人が寄り付かず、その男性が参加表明をするとキャンセルをするメンバーもいた。団体の代表が率先してコミュニケーションを取っていたところ、徐々に周囲のメンバーとの交流も増えていき、最終的にはコミュニティ内の人気者になった。

その男性は、読書会に通い始めた頃に計画していた海外移住を取り止めたようで、猫町倶楽部の代表は、読書会での経験がその男性の人生観を変えたのではないかと考えている。

事例②：予期せず新たな出会い・人との接点・対面で会う機会が増えた事例

参加条件が「課題図書を読了」である猫町倶楽部の読書会には誰でも参加できるため、多様な人が集まる。参加者にとって、多様な人々に出会うことや、様々な話を聞くことができることが読書会の楽しみであるという。コロナ禍になってからは、在宅勤務や外出機会の減少によって誰とも話さない生活を送っているため、読書会が人と話す唯一の機会になっている参加者もいるという。

猫町倶楽部は読書会とは別に「猫町ラウンジ」という会員制のオンラインサロンを運営している。ラウンジには、つぶやきやコラムといった自己表現の場・オンラインでつながって各自で読書をする読書室・読書会以外のテーマで自由に開催されるイベント等がある。コロナ禍でこれまでに通っていた読書会が中止されたため猫町倶楽部に通い始めたという参加者は、読書

を深めることが当初の目的だったが、ラウンジを通して共通の趣味仲間を見つけることや、異なる趣味趣向を持つ意外な人と交流を持つことができたという。コロナ禍でも思いがけず新たな出合いや人と接する機会を持ったその参加者は、読書会とは別に気の合う仲間と新年会等を開催しているという。このように、ラウンジでのつながりが猫町倶楽部への参加を続ける理由になっている参加者もいる。

また、オンライン上の交流に限らず、オペラ鑑賞といった読書会以外のオフラインイベントに参加する人や、メンバーに会いに行くことを目的に自分の住んでいる地域以外の読書会に遠征する人もいる。猫町倶楽部をきっかけに新たな人とつながり、世界を広げている。

<好事例の特徴>

上記で挙げられた事例について、共通して以下のような特徴が見られる。

■読書が居場所を見つけるきっかけとなっている

第一の特徴は、読書が居場所を見つけるきっかけをつくっている点であり、上記の二つの事例に共通している。

事例①の男性は、好きな作家をきっかけに猫町倶楽部を知り、その作家が出演したイベントに参加した後、継続的に読書会に通い続けた。当初は「本さえ読めればよい」、「自分のことを嫌がる人とは付き合いたくない」と頑に姿勢を変えようとしなかったが、徐々に周囲と交流するようになり、1年かけて読書会のコミュニティに馴染むことができた。結局はその男性もコミュニケーションを求めているのではないかと猫町倶楽部の代表は考えており、読書をきっかけに求めている居場所を見つけることができたと考えられる。

事例②のとおり、読書会には多様な人が集まるが、課題図書の読了という共通経験をもっていと初対面でも会話が弾み、感想共有を通して読書会でしか生まれない深い会話や絆が生まれるという。読書会特有の会話や雰囲気共有することで、参加者は属性や年齢に関係なく人間関係を築くことができるという。参加者にとって読書は特別な営みではないというが、その読書をきっかけに集まる読書会は特別な場になっている。

■誰にでも開かれた場である

第二の特徴は、読書会が誰にでも開かれた場である点である。

事例①の男性は、読書会に参加してもすぐ除名になると思っていた。しかし実際は徐々に周囲に受入れられ、人気者になった。この経験は本人にとっても意外なことだったという。猫町倶楽部の読書会は、自分の身近にはいないような様々な人が参加している。さらに、このような人ともコミュニケーションを取らなければならない、それが嫌な場合は自分が辞めなければならないというルールのもと場が運営されている。そのため、参加者は苦手な人を排除するのではなく理解しようという姿勢を持つことになり、それが全体の雰囲気として浸透している。

事例②が示すように、参加者はオンラインやオフラインの様々な機会を通して新たな出合いや接点を持っているが、猫町倶楽部には参加への強制力はなく、誰もが自由に参加できる。オンラインの読書会は好まない人やラウンジには入会しない人がいるが、読書会には所属に関係なく、誰もが好きな本のジャンルを選んで参加ができる。

また、ラウンジのつぶやきやコラムといった自己表現の場も、余程の内容でない限りは投稿を削除しない運営方針であるという。自主性が重んじられた自由に表現できる場がつけられている。

＜特徴に見られる団体の工夫＞

上記の特徴を発揮するために、団体側は下記の工夫を凝らしている。

■ポリシーとルール

猫町倶楽部のポリシーは「来る者は拒まず、去る者は追わず」、ルールは「他人の意見を否定しない」のそれぞれ一つずつであるが、これらが団体に深く浸透している。

事例①では、参加者の男性に当初は人が寄り付かなかったが、上記のポリシーを守るために代表が率先してコミュニケーションを取った。その姿勢が徐々に周囲に波及し、他の参加者の接し方も変わってきた。ポリシーを体現する代表を見て、「自分が好きな場所に居続けるためには自分の見方や姿勢を変えるしかない」という気持ちが参加メンバーに生まれた。結果として開かれた場所が創られ、怪訝な目で見られていた人も受入れられる居場所となった。

事例②のとおり、参加者は猫町倶楽部を通して様々なつながりを持っているが、その前提には「他人の意見を否定しない」ルールがある。否定しない・否定されないという共通認識があるため、参加者は自分と異なる人や異なる考え方を多様と捉え、自由にイベントを企画し、好きなときに好きなものにだけ参加することができる。

以上のように、上記のポリシーとルールの存在が、猫町倶楽部を誰にでも開かれた場及び様々な人にとっての居場所として機能することを可能にしている。

■多様なメニューの存在

猫町倶楽部は様々なジャンルの読書会や読書に限らないイベントを開催しているため、参加者は自分の興味関心・状態・ニーズに合わせて選ぶことができる。

例えば事例①のように、ひきこもりがちな人の外出につながる魅力的なイベントがある。その参加者のように自分の好きな作家や著名人を目当てに猫町倶楽部を通い始めたが、次第に他の参加者とも関係を築き、継続的に活動に参加している人もいるという。

このように、読書会に限らない多種多様なメニューの存在が猫町倶楽部を誰にでも開かれた場になっている。さらに個々人がそれぞれのきっかけで猫町倶楽部に参加でき、参加後も自分のペースで自分にとって心地のよい居場所や関わり方を見つけることができる特徴をつくりだしていると考えられる。

(2) 連携事例及び連携ニーズ・連携における課題

猫町倶楽部による連携事例と連携ニーズは下記のとおりである。

■図書館や企業との連携事例

猫町倶楽部は以前、図書館から声がかかったことから、図書館を利用したイベントを数回実施した。団体の代表によると、本屋や図書館から声がかかる機会は予想していたよりも少ないという。企業向けには、社内読書会に関する助言をしたことがある。

■連携へのニーズ

読書は生きることを深めるために必要な活動であると考え、猫町倶楽部の活動に限らず、読書や読書会の認知度や効果を世の中に広げていきたいと考えている。猫町倶楽部の活動が届く層は、読書が好きな人に限られる。読書が好きではない人、読書は高尚なものであると感じている人にも活動が届けるためには、行政の発信力を借りることができるとよいというニーズが寄せられた。



読書会の様子

2-5. 特定非営利活動法人 エイブル・アート・ジャパン

【団体概要】

- ・団体名：特定非営利活動法人 エイブル・アート・ジャパン
- ・HP：<https://www.ableart.org/index.html>
- ・創業年：平成6年
- ・活動拠点：東京都千代田区（東京事務所）、宮城県仙台市（東北事務所）
- ・事業概要：

アートを通して、だれもが豊かに生きることのできる社会の実現を目指す団体。障害のある人をはじめ、生きにくさを抱えている人たちとともに、障害の種別や有無をこえて、①芸術文化活動を通して豊かな生き方を発見することのサポート、②芸術作品を発表する環境や販売する環境の整備、③美術作品や舞台芸術作品等にアクセスするための機会と環境の整備に取り組む。

(1) 「思いがけず」孤独・孤立の解消に寄与した好事例とその特徴

<好事例の紹介>

NPO 法人エイブル・アート・ジャパン（以下、AAJ）では、「思いがけず」孤独・孤立の解消に寄与した事例として、以下三つの事例が挙げられる。

事例①：精神障害のある参加者が文化芸術活動を通じて変化した事例

精神障害を患い入院していた人が、入院していた精神病院から徐々に社会に慣れるためのリハビリの一環として、元々関心のあった文化芸術に関する活動を調べたところ AAJ が実施する文化芸術活動の存在を知り、参加した。当初は「絵を描くことが好き」という理由で参加するに至ったが、毎月定期的で開催するアトリエ活動や人形劇活動に必ず参加するようになった。徐々に団体スタッフと信頼関係が構築され、自分の過去について話す等自己開示するようになった。さらには芸術活動に加え、イベントチラシの発送業務等 AAJ の業務を一部手伝うようになった。

AAJ の活動を通して、家で長く独りで過ごしていた状態から抜け出すことができた。また、アーティストとして開花し、現在は全国的に活躍している。

事例②：ひきこもり者が文化芸術活動を通して変化した事例

事例①のアーティストの作品を通して AAJ を知ったひきこもりがちの人がいた。この人の相談支援専門員が「家から離れられないがつながりを求めているようなので何か手掛かりはないか」と AAJ に相談し、アトリエのオンラインプログラムから参加することになった。

参加当初は終始カメラオフで参加していたが、AAJ 職員から話を振られると溢れるように話し、数か月後にはオフラインの活動にも参加するようになった。憧れのアーティストとの面会

も叶った。その人は、徐々に外に出る練習やバスに乗る練習を始め、作業所への通所も始めた。

事例③：孤立しがちな障害者の居場所として機能した事例

特例子会社で働く障害のある人・趣味やこだわりが強く周囲とのコミュニケーションに苦労している人・職場で友人関係を作ることが難しい人たちに向けて、AAJは企業と連携し、チラシ送付等を通して自団体の活動の情報を発信し続けている。その結果、チラシを見た特例子会社の人事担当者が自社の障害のある従業員にAAJの活動を案内するケースが増えてきた。現在は、企業に勤める障害者4-5名が継続的にAAJの活動に参加するようになった。

ある演劇のワークショップでは参加者が、「職場で披露したら引かれていただろう」「だがここでは皆すごい、素敵、かついい、面白い、と否定しないで受け止めてもらえた」と話していたという。他の参加者も「職場では差別や疎外感をいつもどこかで感じる」が、この活動では「自分のことを否定する言葉が一切ない」と話していたという。AAJの活動の場では、参加者は周囲に否定されず受入れてもらえる経験を積むことができ、この経験が居心地の良さにつながっているとAAJは考えている。

<好事例の特徴>

上記で挙げられた事例について、共通して以下のような特徴が見られる。

■人が他者や社会と接点を持つことができる

第一の特徴は、外出ができない・ひきこもり状態である・職場に馴染めないといった人が、AAJの活動を通して他者や社会と接点をもつ機会となっている点である。

事例①では、普段から一人で家にこもることが多かった精神障害のある人が、AAJの活動への参加をきっかけに、定期的に外に出るようになった。次第に業務の手伝いをする程にAAJスタッフとの接点が増えていった。

事例②では、ひきこもりがちだった人が、まずはオンラインで、徐々にオフラインで他者と接点を持つようになった。さらに活動の幅を広げ、作業所へ通所するに至った。

事例③では、一般企業や特例子会社等にて障害者枠で雇用された障害者が、AAJの活動に継続的に参加するようになった。AAJの職員やその他の参加者と継続的に接点を持ち、AAJの活動の場で居心地の良さを感じるようになった参加者は、職場とは別の居場所を社会の中に見つけることができた。

以上のように、AAJの活動をきっかけに、社会との新たな接点を持つことや接点を取り戻すことができています。

■誰にでも開かれた場である

第二の特徴は、AAJの活動は誰にでも開かれた場である点である。これは上記の事例に様々な人々が登場していることが示していると考えられる。

事例①の参加者は、活動参加当初は病院から通っていたが、その事実をAAJが知ったのは第1回目の参加から月日が経ってからだった。定期的に参加するようになったその人にとって、

AAJ の活動は何らかの理由で必要なのだろうと考えていたそうだが、本人が自己開示するまでは詳しい事情はあえて尋ねなかったという。

事例②のひきこもりがちであった人は、まずオンラインの場に迎え入れられ、さらに終始カメラオフの状態での参加も受入れられた。そして自身のペースでオフラインの参加へ移行し、作業所への通所を始めてからは AAJ の活動への参加は停止しているという。AAJ はこの人がまたいつでも参加できるよう、オープンな姿勢でいる。

事例③の参加者たちが AAJ の活動を知ったきっかけは勤める企業の人事部からの紹介であった例も多い。企業の人事部は、障害のある職員が必要としている場所かもしれないと思って声をかけ、彼・彼女らも紹介されたので参加してみたところ居心地の良さを感じて継続的に通っているという。

このように、AAJ の活動は、障害の程度・詳しい事情の開示の有無・参加形態に関わらず、誰もが参加できる開かれた場であり、結果的につながりを求めている人の居場所になっている。

■文化芸術が居場所を見つけるきっかけとなっている

第三の特徴は、文化芸術が居場所を見つけるきっかけをつくっている点であり、上記の三つの事例にも共通している。AAJ によると、文化芸術活動は「楽しい・綺麗・素敵・ファッションブル・スタッフが福祉の人らしくない・管理されない」というイメージを持たれるという。

事例①の参加者は、外出する練習になる機会を探しており、「絵が好きだから」という理由で AAJ の活動を選んだという。さらに始めに参加したプログラム（アトリエ）以外の AAJ の文化芸術活動（人形劇）にも参加するようになったことで AAJ との関係を徐々に構築していった。継続的な活動のきっかけは絵が好きな気持ちであった。

事例②の参加者はひきこもりがちであったが、事例①の参加者の絵に関心を持ったことから AAJ の活動へつながった。カメラオフで姿を見せない状態であっても、文化芸術のテーマについては自身の想いをさらけ出すことができた。さらにはひきこもり状態から外に出て、憧れの人と対面したが、そのきっかけはその人がアーティストであり、その人の作品に関心を持ったことである。

事例③では、参加者は演劇のワークショップの中で、好きなように自分を表現して他者を受け入れ受入れられる経験をしている。文化芸術の手助けによって自己表現し、それを通して生まれた居心地の良さが継続的な参加につながっている。

<特徴に見られる団体の工夫>

上記の特徴を発揮するために、団体側は下記の工夫を凝らしている。

■支援者側が傾聴する姿勢・相手を否定しない姿勢を大切にしている

AAJ は、人に向き合って親身に話を聴く姿勢や共感する姿勢を大切にしている。事例②③では、ひきこもりがちの人や障害者が、他者に傾聴されることや受入れてもらうことを通して自己開示や自己表現が促され、さらに安心を感じているように見受けられる。また事例③では、自分が好きなように表現しても否定せずに受け止めてもらえることで参加者は居心地の良さを

感じ、活動への参加継続につながっている。共通しているのは、AAJ が活動指針として大切にしている、被支援者の変化は本人にしか分からないため、周囲の意見や期待を押し付けず、真摯に向き合って傾聴するという姿勢である。

このような傾聴する姿勢・相手を否定しない姿勢が、人が他者や社会と接点を持つ上での安心感と心理的安全性を醸成していると考えられる。

■幅広い対象層にアプローチできるよう、積極的に情報を発信している

AAJ は、文化芸術を通じた交流の機会を幅広い対象層に届けるために情報発信を積極的に行っており、その成果が事例に見られる。

一つは特定の層に向けた積極的な情報発信であり、事例③がこれにあたる。事業を通じて、企業や特定子会社に就労している障害者が職場でのコミュニケーションや友人関係づくりに苦勞しているという課題が顕著になったことから、企業・特定子会社の人事部向けに積極的に情報発信を行った結果実現した。

もう一つは幅広い層への発信である。AAJ は活動当初、福祉関係者へ情報を届けるべく福祉施設へのアプローチを積極的に行い、その結果福祉施設で働く人は多く活動に参加したが、当事者や在宅勤務者には情報が行き届いていないこと、また機会を必要としているが情報が届いていない人が多く存在することに気づいた。これを解消するため、多くの県民・市民が手に取る媒体『県民だより』や『市政だより』への掲載を開始した。その結果、遠方の人や在宅勤務者からの問い合わせが増えているという。

■文化芸術を軸とした場づくりと発信

AAJ は文化芸術活動を通じた体験・交流により、障害や生きにくさを抱えている人たちとともに豊かな生き方を発見することを目指して活動している。事業や活動には福祉の要素を持ち合わせているが、障害のある人となない人がともに交流し学び合う場の創出、及び、文化芸術活動をともに楽しむという体験そのものに重きを置いている。そのための工夫が情報発信と場づくりに見られる。

情報発信においては、発信する内容に工夫が見られる。文化芸術に関心のあるあらゆる層に興味を持ってもらうため、福祉サービスとは異なるアプローチとして「楽しい・きれい・素敵・おしゃれ」といった印象につながる発信を心がけている。その理由は、障害のある人となない人がともに交流する場をつくるためには、文化芸術を誰もが共有できるものとして発信することが有効だからである。例えば、一般的な福祉サービスと認識されると、そこに属しないと感じる人が距離を感じてしまう。上記の事例①及び②はこの好事例にあたる。事例①の参加者は AAJ の活動を知り、自身が以前から好きであった文化芸術活動にまた関わりたいと思ったことが参加につながり、事例②の参加者はアーティストになった事例①の参加者を知って「かっこいい」と思ったことが AAJ の活動への参加につながった。

場づくりにおいては、障害のある人となない人が交流する機会をつくる立場として、プログラム内で「障害者」という言葉を使わないことを心がけているという。プログラム名に障害者という言葉が入っている場合でも、その場では使わないことで、誰もが自然に文化芸術活動を楽

しむ場をつくりだしている。その結果、参加者は居心地の良さを感じ、通いつけているのではないかという。

(2)連携事例及び連携ニーズ・連携における課題

AAJ による連携事例と連携ニーズは下記のとおりである。

■行政との連携事例

AAJ は「誰のために仕事をしているか」を見失わないこと、関係者で共通の目的を持つことを大切にする姿勢がある。例えば、自治体間の連絡調整がうまくとれなかったことで、その地域に住む障害者に必要な情報が届かず当事者が不利益を被っていたことがあった。AAJ は連携上の問題を指摘し、間に入る形で複数回対話の機会を設け、連携の促進を促した。その結果、連携会議の開催が標準化され、その他の行政と NPO の連携事業にも波及した。

加えて、普段の業務から行政と連携することを心がけているという。現場で課題を肌で感じてもらうことが大切であると考え、可能な限り行政の職員に現場への同行や研修への参加を呼び掛けている。

■連携ニーズ

AAJ は小規模な団体だからこそ連携が必要だという。他団体と連携することで、自団体は得意なことに集中することができること・自団体だけではできないことが可能になること・相乗効果が発揮されてより大きな成果につながるということが理由に挙げられた。

中間支援団体である AAJ は、連携する団体の強みを理解・尊重し、時にはそれらを通訳する立場として、また時には衝突しながらも共通の成功体験を持つことで更なる連携へとつなげているという。



せんだいメディアテーク

展覧会「定禅寺パターゴルフ???倶楽部!!」開催イベント
プレイのルール説明を受ける参加者



参加者がパターゴルフを体験する様子

3. 総括・示唆

3-1. 「思いがけず」孤独・孤立の解消に資する活動を行っている団体の取組傾向

(1) 総括

孤独・孤立の解消を直接目的としていない団体においても、「属性を越えて人が他者や社会と接点を持つ」機会を生み出す活動を行うことで、孤独・孤立の予防や解消に貢献し得ると考えられる。今回の調査で孤独・孤立の予防や解消に資する可能性が確認された事例は、大きく「交流・体験の場を創出する活動」と「地域で見守りを浸透させる活動」の二つに分類できる。それぞれの活動が孤独・孤立の予防や解消につながる上での取組傾向として、下記にあげる5点が今回の調査から浮かび上がってきた。

<交流・体験の場を創出する活動の事例から>

■人と人が出会い、対話し、ともに体験する機会（以下、交流・体験の場）を提供していること

今回調査を行った5団体のうち、コモンズ、キッズドア、AAJ、猫町倶楽部の4団体において、ひきこもりや障害の有無等に関わらず、属性を越えて人が他者と出会い、対話し、ともに体験する機会や場が提供されていることが共通していた。

場の立て付けや内容は、読書や文化芸術活動、農業体験や森林保護活動、こどもの職業体験等、多岐に渡る。コモンズ、AAJ、キッズドアの一部の活動のように、ひきこもりや障害等、特定の支援ニーズがある人となない人が混ざり合う機会を創出する例もあれば、猫町倶楽部やAAJの一部の活動のように誰でも参加可能な開かれた交流や体験の場に、ひきこもり者や障害者等が自ら参加する例も見られた。

■「誰でも参加可能な開かれた場」の創出を通じて交流・体験の場を提供していること

「特定の支援ニーズがある人とそうでない人が混ざり合う機会の創出」においては、特定の対象者に対する支援を行う団体が、他の団体や地域の事業所と連携することで「誰でも参加可能な開かれた場」を創出する方法を取っていることがコモンズ、キッズドア、AAJの3団体に共通して見られた。また、「誰でも参加可能な開かれた場」を創出しつつも、特定の支援ニーズがある人の参加を促進するコーディネートがあることがこのような機会の創出を可能にしていることがわかった。

「特定の対象者に対する支援の場」と「誰にでも開かれた交流の場」には、それぞれに異なる特性と重要性がある。前者は特定の対象者に限定していることによる安心感や所属意識が芽生えやすく、また特化型の適切な支援の提供が可能である。一方で、特定の対象者に絞ることにより、支援や機会を必要としていながらも、そこに当てはまらない人が必ず出てきてしまう。後者は、ひきこもりや障害等、特定の支援ニーズがある人が同質性の高い特定の限られた世界にだけ居場所を持つのではなく、社会に存在する多様性と混ざり合う体験を提供すること

が可能である。このような経験を通して、自尊心・周囲からの受容感・貢献意欲が醸成され、自発的に社会と接点を持つきっかけや動機づけにつながると考えられる。

したがって、特定の対象者に対する支援に特化した団体や取組、広い対象者に対して開かれた交流を生み出す団体や取組、それぞれが存在することが重要である。その上で、今回の調査の中で好事例と呼べる取組から、それぞれの団体や取組が連携し、異なる背景や特性を持つ人が属性を越えて混ざり合う機会を創出することが、孤独・孤立の解消に資するアプローチの一つとなり得ると考えられる。

■文化芸術活動や環境保全活動が交流・体験の場をつくる手段になっている

文化芸術を扱う AAJ と猫町倶楽部では、読書やアートが人が他者と出会うつながる強力なきっかけとなっており、コモンズでも同様に、森林保全活動や農業体験が人が他者と出会いともに体験するきっかけとなっていた。いずれの事例も、こうした共通の興味関心や体験が軸となり、活動への参加や参加者間の対話・つながりを醸成する手段となっていた。

AAJ と猫町倶楽部に共通しているのは、文化芸術活動を共通項に、年齢や属性を問わずにフラットにつながることができること、自身の考えや価値観をオープンに表現することが可能という点である。アンケート調査で明らかになった『「第7号 環境の保全を図る活動」「第6号 観光の振興を図る活動」「第4号 学術、文化、芸術又はスポーツの振興を図る活動」の3分野は他分野と比較して活動において孤独・孤立との接点を感じにくいことが想定される』との示唆について、活動の参加対象者層の幅広さゆえに自認している団体が少ないことが推察されるとあるが、文化芸術も環境保全活動も、それ自体は孤独・孤立の解消を目的とするものではないものの、交流・体験の手段となり得る点において、孤独・孤立の予防につながり得る相性の良さがあると考えられるのではないかな。

<地域で見守りを浸透させる活動の事例から>

■地域住民の間で気づきの目を増やす

キッズドアでは、地域での連携の取組が思いがけない形で見守り機能を発揮することにつながった事例が確認された。新発田市社協では、同団体が実施する地域みまもり隊の活動が思いがけず地域の企業・事業所・住民に広く浸透した事例が確認された。両団体の事例において、見守りが浸透した共通の傾向として、地域住民の視点の変化が挙げられる。

キッズドアの事例では、キッズドアとの接点を通じて地域の事業所・団体・地域住民が身近な環境に支援が必要な子どもや家庭が存在することを知ったことで、孤立しがちな子どもや家庭等、周囲からは一見見えにくい課題に対する気づきの目が養われた。これにより、地域住民が困り事を抱えている子どもや家庭の異変に気づき、必要な支援につなげるアウトリーチの事例に発展した。

キッズドアの事例では日々の接点や連携から自然発生的に地域住民の間で気づきの目が養われたことに対し、市を挙げた見守り活動の展開に取り組む新発田市社協では、体系的な仕組みをつくることで、見守り活動に関わる地域住民・事業所・団体の視点が醸成されていた。地域の特性や課題を熟知した新発田市社協が、見守りが必要な人は誰か・どのような視点を持つと

異変に気づけるか・判断に困った際にはどのように対応すべきかを体系的にまとめ、わかりやすい形で発信することで、見守りに関わる人々の気づきの目を養う仕組みをつくっていた。

この二つの事例はアプローチは違うが、地域住民が身近に見守りが必要な人がいることを認識し、身の回りの異変に対するアンテナが高まった結果、見守りが浸透したことが共通している。これらの事例から、身近な環境に見守りが必要な人がいること、具体的にどのような人が見守りを必要としているかを発信することによって、地域の人々の視点や意識に小さな変化を起こすことが、気づきの目を増やし地域に浸透させていく上では有効であると考えられるのではないか。

■地域での「役割」や「関わりしろ」をつくる

新発田市社協の事例から、思いがけず見守り活動が広く地域に浸透した背景として、誰もが気軽に地域や社会に関わることができる役割や関わりしろをつくることの効果が確認された。新発田市社協では、見守りをする人がプレッシャーを感じることなく日常生活や日々の業務の延長線上で無理なく活動することができる「ながら活動」を採用している。このように、思い立ったらすぐに手を出せる気軽さ、強制力がなく自分のペースで参加できるハードルの低さ、日々の生活の延長線上で実施できる身近さを兼ね備えた形で役割づくりをしたことが、この活動が地域に広く浸透した要因であると考えられる。

地域で見守り活動が広く浸透すること自体が、地域で孤立しがちな人・孤独を感じている人・相談や支援を必要としているが声を上げることができない人のセーフティネットとして機能し、孤独・孤立の予防や解消につながると考えられる。それに加え、新発田市内の郵便局の局員や天王元気会のメンバーのように、見守り活動を通じて地域や地域住民と接点を持つことで、地域における自身の存在意識や地域への帰属意識、地域貢献への実感を得ることにつながったことも確認された。これはキッズドアを利用していた子どもが、大学生になって支える側としてキッズドアの活動に戻ってきたことにも共通する。地域や社会の中で役割や関わりしろをつくることは、地域や社会への帰属意識の醸成や他者とのつながりを創出する効果もあると考えられ、この点においても孤独・孤立の予防策の一つとして貢献し得ると考えられるのではないか。

(2) 示唆

孤独・孤立の解消を直接目的としていない団体においても、属性を越えて人が他者や社会と接点を持つ機会を生み出す活動を行うことで、「周囲からの受容感を得られる」という価値と「社会への帰属意識が醸成される」という価値を創出し、その結果孤独・孤立の予防や解消をし得ると考えられる。

「周囲からの受容感」の観点では、例えばコモンズでは、ひきこもり者が一般市民向けの山林整備活動や農業体験に参加したことにより、多様な世代や属性の人々と接点を持ちその場に受入れられた実感と活動に貢献できたという充実感が、自発的に他の交流活動に参加するきっかけになったことが確認できた。猫町倶楽部においては、ひきこもり者が読書会に参加したことを機に、自分の好きなことや考えをオープンに表現でき、周囲から受入れられたことが、自信をもつきっかけにつながったという事例が見られた。また、AAJにおいても、文化芸術活動

の場がひきこもり者にとって自己表現ができ、社会との接点を取り戻すきっかけになったという事例が確認された。

「社会への帰属意識の醸成」の観点では、例えばキッズドアでは、困窮家庭や不登校の子どもが社会の多様な人や価値観と出会うことで、多様性のある社会の中にいる自分という存在を認識できるようになり、この経験が自立に向かう上では重要であったことが確認できた。新発田市社協においては、地域住民が地域を見守る役割を担うことで、地域住民と地域との接点生まれ、住民自身の存在意識や地域への所属意識の醸成につながったという事例が見られた。

孤独・孤立対策では、生活困窮者支援やひきこもり支援等、特定の対象層に対する支援を目的とした団体や活動が注目されがちだが、今回調査を行った5団体の事例は「属性を越えて人が他者や社会と接点を持つ」機会を生み出す活動も孤独・孤立の予防と解消に寄与し得ることを示唆するものであったと考えられる。このように一見孤独・孤立対策とは直接関係がないように見えるものの、孤独・孤立の予防や解消に資する活動を行っている団体は多く存在していると考えられる。

孤独・孤立対策を直接的な目的としていない・自認していない団体においても、事業の対象層を捉え直すことや他団体との連携により対象者の幅を広げることによって、孤独・孤立の解消に資する可能性や発展性があると考えられる。今後、地方自治体がNP0法人等との連携を通じて孤独・孤立対策を進める際には、特定の支援に特化した団体のみならず、このような団体を視野に入れながら広く呼びかけていくことが対策の促進に資すると考えられる。

3-2. NP0 法人等の連携促進に向けた役割や取組への示唆

(1)総括

アンケート調査の結果から、多くのNP0法人等にとって、「人材の確保・育成・定着」「財源の確保」等のリソース不足が課題であることがわかった（アンケート調査：『孤独・孤立対策に資するNP0法人等への調査報告書』、P.20）。今回の調査においては、NP0法人等は各団体単独の活動を通じて十分に孤独・孤立の解消に資する活動を行うことができるが、行政・地方自治体や他分野のNP0法人等、民間企業や地域の事業所等との連携により、活動の幅が広がり、更に効果的に孤独・孤立の解消に資する活動を行っている傾向が見られた。今回調査を行った5団体の事例から、他機関との連携の在り方には「必要なリソースを集めるための連携」と「互いのニーズを補完した実務連携」の主に二つの方向性があると整理できる。

「必要なリソースを集めるための連携」については、具体策として、第2章に記載した新発田市社協と新発田市役所の連携の事例、AAJの地域広報紙への掲載の事例において、情報発信力の不足を補うために行政や自治体と連携する動きが見られた。また、コモンズのひきこもり者支援の体験機会創出の事例、AAJの障害のある人となない人が一緒に楽しむ体験機会の創出の事例において、自団体に不足する人・モノ・金・ネットワークを補完することを目的に、地方自治体・NP0法人等の他団体・事業所・地域住民等と連携を積極的に行っている動きが見られた。

「互いのニーズを補完した実務連携」については、具体策として、第2章に記載したコモンズ他団体との連携によるひきこもり者の体験機会の創出の事例、キッズドアの企業との連携の事例において、実務的な連携が見られた。また、これらの団体では、連携を促進するため

に、連携し得る団体のリソース・強み・活用方法・ニーズを理解すること、このような団体と接点を持つ機会をつくること、お互いの強みやニーズを考えた上で声かけし、すり合わせ、連携方法を探ることを心がけている傾向が見られた。

(2) 示唆

NP0 法人等の多くが抱えるリソース不足の課題に対して、他機関連携が有効な手段であること、他機関との連携の在り方には「必要なリソースを集めるための連携」と「互いのニーズを補完した実務連携」の主に二つの方向性があることがわかった。

他機関連携を行う上では、各団体の連携事例の多くで実践されているように、自団体と相手団体の双方の課題とニーズの把握ができていることが求められることも明らかになった。両者にとって利点が生まれることにより連携は実現するため、信頼関係を醸成しながら、両者の課題を起点に解決策を描いた上で必要なリソースにアクセスすることが重要であると考えられる。

一方で、他機関と接点をつくり、強みやニーズを把握するためには人的・時間的・金銭的コストがかかる。実際に、連携に成功している団体を見ると、コモンズ及び AAJ は中間支援団体の役割を担っていることもあり、業務の一貫又は連携促進のために、他団体の強み・ニーズの把握や自団体の強み・ニーズの発信を積極的に行っている。

しかし、他団体との連携に全ての団体がコストを費やせるとは限らない。したがって、リソースの限られる団体にとっては、多様な団体の強み・ニーズを把握し、強み・ニーズが合致する連携の組み合わせを考え、その団体をつなぐ役割を担う中間支援団体のニーズが高いのではないか。AAJ でも「お互いの強みを理解・尊重すること、時にはそれらを通訳する立場の人が必要」というコメントがあった。

今後、NP0 法人等が他機関連携を検討する際には、自団体のみで連携を模索するリソースや連携のためのネットワークが不足している場合、中間支援を専門とする団体に頼ることも有効な手段であると考えられる。また、地方自治体が NP0 法人等との連携を通じて孤独・孤立対策を進める際にも、中間支援団体を巻き込み、中間支援団体の持つリソースやネットワークを活用することが有効であると考えられる。